

冷血公爵の  
こじらせ純愛事情

南 玲子

REIKO MINAMI



ノーチエ文庫

## サイラス

メイスフィールド公爵家の当主。  
感情を表に出さず、無慈悲な  
判断も辞さないことから  
「冷血公爵」と呼ばれる。  
夜会でアリシアと出会って以来、  
彼女に執着して——？

## チャールズ

メイスフィールド公爵家の  
執事。家人に全身全霊で  
仕える。

## ローラ

メイスフィールド公爵家の  
侍女。滞在中のアリシアを  
世話している。

## ルーカス

ギルマイヤー侯爵家の  
当主。国の諜報員として  
働いており、任務中に  
アリシアと出会う。

## ダレン

サイラスの弟。  
兄を敬愛するあまり、  
アリシアを目の敵に  
している。

## アリシア

子爵を伯父に持つ庶民。  
本が好きで、王立図書館で  
司書の補佐として働いている。  
サイラスとの一夜の過ちが原因で  
公爵家に監禁されることに。

登場人物  
紹介

## 目次

冷血公爵のこじらせ純愛事情

7

書き下ろし番外編

『冷血公爵』の意外な一面

359

冷血公爵のこじらせ純愛事情

## プロローグ

私——アリシア・バートリッジは、まるで夢の中にいるような気分だった。ここがどこで、自分が何をしているのかもよくわからない。ただとても心地よく、幸せな気持ちで目を開けた。

すると目の前に、美しい男性の顔がある。どうやら私は彼に組み敷かれているらしい。今まで見たことのないほど鮮やかな青色をした瞳。柔らかい茶髪は、ところどころ光を反射し、金色に煌めいている。彼の唇から漏れる熱い吐息が、私の頬を撫でた。

美形の彼はおそらく三十代半ばで、大人の色気を醸し出している。その瞳の奥には燃えるような情欲の炎が灯っていた。

彼は熱い息を漏らしながら、私の体に手を這わせる。大きな手が私の腰に触れた拍子に、私は自然と腰を浮かせてしまう。

体の中心が、まるで炎が宿ったように熱くなった。その熱はゆっくり全身に広がり——切なくて、もどかしくてたまらない。私は縋るものを求めて、両腕を伸ばした。すると次の瞬間、全身が何かに包まれる。彼に抱きしめられたのだと気がつき、私は腕にぎゅうっと力をこめて抱きしめ返した。温かくて、お風呂に浸かっているかのように心地いい。

「本当に幸せだ……っ。君に出会えて、心から嬉しい……！」

「ん……っ！ ふ……っ、んん……」

くちゅくちゅと淫らな水音が響き、私の体が快感に震える。

気づけば涙がこぼれて、頬を伝っていた。

「ああ……ん……っ、はあ……っ」

自分の口から、信じられないほど甘ったるい声が漏れてしまう。彼の体の熱も、口づけも、経験したことがないくらい気持ちがいい。彼のことも、これ以上ないほど愛おしく思える。

それはあまりにも私の日常とかけ離れていて——きつと夢を見ているのだろう、と思った。

夢ならばいいか、と快感に身を委ねる。そして夢中で、彼のがっしりした体を抱きし

めた。

すると、体の奥で熱いものが擦れるような感覚がある。それがまた愉悅を呼び、たまらず声を漏らした。

「はあ……っ、んん……ん。ああ……っ」

吐息まじりの甘い声が、淫靡な空間に響く。

全身をくまなく愛され、愛し、心が満たされる。そんな夢を見た……はずだった。

## 1 出会いはベッドの中で

「う……ん……ん……」

鳥のさえずりで目を覚まし、私は重い瞼をゆっくりと持ち上げる。

すると、見知らぬ男性の顔が目飛びこんできた。

長い睫毛に、筋の通った鼻。形のいい唇はほんの少し開いていて、規則的な呼吸の音が聞こえた。どうやら男性は眠っているようだ。

(誰!?)

私は一瞬驚いたが、すぐに夢だと思い直して瞼を閉じる。

(……ああ……私、まだ夢を見ているのね)

しかし、頬に触れるシートが、自室のものより格段に柔らかい。夢でもこんなにリアルに感じるものかと疑問に思いながら、再び目を開けた。そして、ゆっくりと考えを巡らせる。

私はアリシア・パートリッジ、二十歳。パートリッジ子爵を伯父に持つが、紡績工場

を営む父のもとに生まれた平民だ。二ヶ月前から王立図書館で司書の補佐として働いている。

しかし昨夜は、従姉のルイスの代わりに、公爵家の夜会に出席した。ルイスが風邪を引いてしまったと聞き、私を連れて行ってと伯父にねだったのだ。今まで何度かルイスの代理で夜会に出席したことがあったから、伯父はあっさり了承してくれた。

夜会はとても豪華だった。料理もお酒も高級で美味しいものばかりだったから、挨拶もそこそこに、夢中でお腹を満たしたことは覚えているのだけど……その先が、全然思いつけない。

(……もしかして、これは夢じゃなくて……現実!?)

私は慌てて体を起こそうとしたが、それは叶わなかった。

どうやら男性に抱きしめられているようで、体がまったく動かないのだ。

「ここは、ど……どこ!? こ……この人は、誰なのっ……!?!」

思わず、かなり大きい声で叫んでしまう。しかし目の前の男性が起きる気配はない。

その時、自分が一糸まとわぬ姿であることに気がついた。私を抱きしめている男性も、同じく裸のようだ。

(これは——かなりマズい状況なのではないかしら)

私ほとにかく状況を把握したくて、あたりを見回した。

今いるのは、天蓋付きの大きなベッドの中らしい。部屋は広く、テーブルセットなど一通りの家具が揃っている。家具にはどれも繊細な装飾が施され、いかにも高級そうだが室内に、他の人の気配はない。

改めて、私を抱きしめながらぐっすりと眠る男性の顔を見る。彼は一体何者なのだろう。

きつと夜会で出会った人なのだろうが、ちっとも思い出せない。

——頭を悩ませているうちに、とんでもないことに気がついた。これはきつと、早急に解決しなければいけない問題である。

私たちはベッドの上で横向きになり、向かい合っている体勢だ。私の右足は男性の腰の上ののっついていて、隙間もないほど体が密着している。

そして、信じたくないことに、私の股の間にとてつもない違和感があった。違和感というよりも、異物感と言ったほうがいいだろうか。まるで、何かが中に入っているかのようだ。

いや、もう認めなくてはならない。

彼のモノが、私の中に入っているのだろう。——どうしてこうなったのかは、理解に苦しむが。

（これは何かの間違いだわ。なんらかの事故で、こうなってしまっただけよ!!）  
私はもう一度、昨夜のことを思い出してみる。

（料理とお酒を楽しみながら会場を巡<sup>めぐ</sup>っていて……ああ、そうだわ。伯父様とはぐれたのよね。探していたらお酒が回<sup>めぐ</sup>ってきて、酔いを覚<sup>さ</sup>まそうと中庭に出て……。素敵な庭園で、とても感動したのよ。それでその後どうしたのかしら——ああ……、彼のことは、まったく思い出せない）

とにかく今の状況から脱<sup>だ</sup>したいのだけれど、どうしたらいいのかさっぱりわからない。私は恥<sup>ち</sup>ずかしさに悶<sup>も</sup>えながら、男性の安らかな寝顔を見つめた。彼は熟睡<sup>じゅくすい</sup>しているようで、まだ起きない。

夜会では、招待客が休憩できるよう、いくつかの部屋が開放されるものと聞く。この高級感溢<sup>あふ</sup>れる部屋は、夜会の会場だったメイスフィールド公爵家の一室なのだろう。そんな場所<sup>あそ</sup>で一夜の過<sup>あや</sup>ちをおかしてしまったというのは、大変マズい。

何より私は、子爵令嬢である従姉<sup>いとこ</sup>の代理で、ただの平民。この話が広まれば、伯父<sup>おじ</sup>のパーティリッジ子爵に迷惑<sup>いざこ</sup>がかかってしまうかもしれない。

不幸中の幸い<sup>あ</sup>でも言うべきか、窓の外はまだ薄暗い。この暗がりに紛<sup>まぎ</sup>れて屋敷から抜け出すことは、不可能ではないだろう。

何もなかったことにして、屋敷から出よう。

そう決意して、私は男性の腕<sup>うで</sup>の中から抜け出そうとした。しかし彼と繋<sup>つ</sup>がつた状態である上に、ガッチリと抱<sup>か</sup>きしめられているせいで、少しも動けない。

「うう……ん……」

彼が急に唸<sup>うな</sup>りだしたかと思えば、私の体を抱<sup>か</sup>きしめたまま仰<sup>あおむ</sup>向けになった。そのせいでさらに深く繋<sup>つ</sup>がつてしまったようで、おへその下がきゅうんと収縮<sup>しゆく</sup>する。

「……え……あ……やっ……」

しかも、彼はより一層腕<sup>うで</sup>に力をこめてきた。彼の隆起<sup>りゆうき</sup>した胸筋<sup>ちゆうきん</sup>に顔が押しつけられて、息が苦しい。

「ん……んんっ——」

——いや、それだけではない。彼自身が、私の中で容量を増<sup>あ</sup>ってきているのだ。そのせいで体が勝手に火照<sup>はて</sup>って、変な感覚に襲<sup>お</sup>われている。

胸の鼓動<sup>こどう</sup>が速<sup>はや</sup>くなり、瞳<sup>まぶた</sup>が潤<sup>うる</sup>んでしまふ。泣<sup>な</sup>きたいような切<sup>き</sup>ないような気持ちで、いっぱいになった。

こんな状態ではもう、彼に気づ<sup>き</sup>づかれずに脱出<sup>だつしゅつ</sup>することなど不可能だ。私は両腕<sup>りやうぶ</sup>を彼の胸<sup>ちゆう</sup>に置くと、思い切り力をこめて上半身<sup>じやうはんしん</sup>を起<sup>た</sup>こした。



すると、彼はようやく腕をほどき、ゆつくりと目を開ける。見覚えのある綺麗な青色の瞳だ。

よかつたと思う一方で、私は身をこわばらせた。彼の剛直がますます膨張するのを感じ、体が小刻みに震えてしまう。

涙が頬を伝い——我慢できなくなった私は、彼に頼むしかなかった。

「あ……駄目——もう……大きくしないで……っ」

「なんだ……!? くっ……っ！」

彼も意識がはつきりしたらしく、目を大きく見開いた。けれど次の瞬間、苦しそうに目を細める。

息を呑みながらそれを見つめていると、彼はくしゃりと顔を歪めた。その頬には赤みがさし、笑っているのか泣きそうなのかわからない表情だ。

「——ああ、君か。あれは夢じゃなかったんだな……」

「は……早く、抜いて……お願い……ああ……っ」

私は彼にまたがったまま、懇願する。涙が溢れて、彼の胸の上に落ちた。

「駄目だ……。私は君の中からまだ出たくない。このまま君といつまでも繋がっていたい。こんな気持ちは初めてだ」

男性は甘やかな声で囁くと、体を起こす。そして私の腰に手を回して、大事そうに抱きしめた。

ぴつたりと肌が重なり、彼の体温を感じる。同時に、体の奥深くに挿入された剛直が動いた。

「ああ……っ！」

私が声を上げると、彼は吐息を漏らす。

「はああ……君の中はなんて温かいんだ」

私のほうは、温かいというよりも熱い。まるで灼熱の楔に貫かれているみたいだ。そう思っていたら、彼は私の腰を掴んだまま、上下に動きはじめた。

入り口近くまで引き抜かれた熱い塊が、体内をえぐるように突き上げてくる。そのたびに、私の口から嬌声が上がった。

「あっ、あっ、……やっ……んっ！」

異物への違和感が、次第に今まで味わったことのない快感に変わっていく。

「やあっ！ ああ……っ！」

彼は私の体を何度も持ち上げては力を緩め、質量を増した硬い楔で穿つ。

ギシッギシッと軋むベッドの音と、ぐちゅぐちゅといやらしい水音が部屋の中に響く。

あまりの淫靡いんぴさに、恥はずかしさが押し寄せる。

「やあつ……ああ、駄目え！」

「くうつ……あまり締めつけないでくれ。これ以上きつく啞くわえこまれたら、もう持たない。イってしまえうさだ」

そう言うと、彼は突然体勢を変えて、私を仰向けにした。あつという間に上下が逆転して、視界にベッドの天蓋てんがいが広がる。

そして、余裕を失った彼に組み敷かれた。彼の額ひたいには汗に濡れた前髪が貼りつき、頬は朱色に染まっている。まるで獲物を貪むさぼろうとする獣けもののようだ。

「これ以上に幸福なことは、おそらくこの世には存在しないだろう……」

彼は自身を挿入したまま上半身を屈かがめ、私の体にキスを落としはじめた。

「ひやつ……!？」

驚く私をよそに、唇を肌はに這はわせていく。そしてちゅちゅつとキスを繰り返しては、私の反応を確認するかのようにゆっくり舌先で舐なめた。

まるで全身を味わい尽くされているみたいだ。しかし彼の動作は優しく、甘さすらある。

「あつ……ああ……あ」

吐息まじりの嬌声きようせいが、何度も口からこぼれてしまう。

（ああ、駄目。何も考えられなくなりそう……！でも早くこの屋敷を抜け出さないと、大変なことになるわ。そうなったら伯父様おじに迷惑がかかってしまう……）

私はなんとか力を振り絞り、彼を両手で押し返そうとする。けれどそれほど力が入らず、彼の体を無闇むやみに触ふってしまう。

それを彼は、私が求めているのだと思っただけ。

「君はおねだりがうまいな。これほど感情を乱されるなんて思ってもみなかった。そんなに寂さびしそうな顔をしないでいい。すぐに君の最奥を突ついてあげよう」

「ま……待まちってくださ……話を……あつ！」

彼は言葉を遮おさえるように腰を動かし、私の中を強く穿つった。

「ああつ！ やあああんつ……！」

理性を揺さぶるような強い快感に襲われ、私は悲鳴を上げる。

彼の剛直こうちくが、何度も荒々しく最奥を穿うつ。腰を掴つかまれ上下に動かされていた時とはまた違う激しさに、あつという間に翻弄ほんろうされた。

快感に浮かされながらも、なんとか彼の顔を見る。やはり見知らぬ男性であることは間違まちがいない。

でも不思議と嫌ではなかった。それどころか、体と心が満たされていく。

そんなことを考えていると——ある場所を、ガツンと穿たれて頭が真っ白になる。  
「あああ……っ!!」

強烈な快感が頭のとっぺんからつま先まで駆け抜けて、甘く甲高い声が上がった。  
男性は顔を歪めて唇を噛みしめ、全身をブルリと大きく震わせる。

「く……っ!!」

彼が声を漏らすのと同時に、私の中に熱が広がったような気がした。

「はあっ……あ……はあっ」

（これで終わったの……かしら？）

初めて味わう悦楽の余韻の中で、やっと思考が働きはじめる。

彼が私の足に、優しくキスを落とすのが見えた。

（とにかく、早く彼を説得してここを抜け出さないと……）

その時、男性が私の全身を舐めるように見ていることに気がつく。

途端に羞恥心が湧いてきた。いたたまれなくなった私は、両手で彼の目を覆う。

「見ないでくださいっ！ それに早く、服を着ないと……！ こんな状況を誰かに見られでもしたら、言い訳ができな——んんっ!」

突然、彼が唇で私の口を塞いだ。舌が強引に入ってきて、私の口内をくちゅくちゅと

翳る。

抵抗しようとして体に入れた瞬間、あることに気がついた。

——私の中に入ったままの彼自身が、再び硬くなっている。

「んんん!!」

私が抗議の声を上げると、彼はしぶしぶというように唇を離した。

「まだだよ……これでは終わらない。君がそんな顔で私を煽るのが悪いんだ。それに、誰かに見られても言い訳などする必要はないよ」

そう言うと、再び唇を寄せてくる。私は慌てて顔を背けた。

「待って！ 話を聞いてください！」

「今は駄目だ。もう少し君を味わいたい。あとで、いくらでも聞いてあげよう」  
なおも口づけしようとする男性に、私は負けじと言う。

「あっつ！ これは何かの間違いですよね？ なんらかの理由で裸になったら、偶然こんな風になってしまった、みたいな……!」

今にも腰を打ちつけようとしていた彼は、私の言葉を聞いて動きを止めた。  
そして、鋭い目つきで睨みつけてくる。

あまりの豹変ぶりに、私の背筋に寒気が走り、体がビクリと震えた。

すると彼は、一層目を吊り上げる。どうやら怒らせてしまったらしい。何が悪かったのだろうか。

困惑する私に、彼は低い声で尋ねる。

「間違い、だと……?」

「え……ええ。間違い、ですよね?」

「……もしかして、君は昨夜の出来事を、何も覚えていないのか?」

彼はそう言うのと、熱い塊をギリギリまで引き抜いた。

その切ないような感覚に、思わず声が出る。

「ふあ……っ」

「どうなんだ!!」

苛立つたように聞かれて、少し怯えてしまう。

「す、すみません……! 実は、何も記憶がなくて……ああん!」

彼の熱い楔が、ゆつくりと奥へ侵入してくる。その緩慢な動きに、私の中がきゅううんと収縮した。

「記憶がない……。そうか、あの幸せな時間を、君は覚えていないのか……」

彼が何やらつぶやいたが、よく聞こえない。

「……っあの、すみません、今なんて——」

「覚えていないと言うのならば、教えてあげよう。昨日、君が私のことを誘惑したのだ。名前も名乗らず、実に淫らなやり方だな。私は本来、名も知らぬ女性を抱くような男ではないのだが、昨夜はどうかしていたらしい。私の理性を揺るがすなんて、相当なものだ。媚薬でも使ったのか? 君は一体何者なんだ? そうまでして、私に取り入りたかったのか!？」

「えっ、ちがっ——やあっ!」

彼は叫ぶように問うやいなや、腰を動かかしはじめた。熱く昂った剛直が、蜜をたたえた肉壺を緩やかに刺激する。

「あああっ……ん!」

甘やかで切ない快感に襲われ、体に力が入らない。何度も中を擦られて抵抗すらできなくなってしまう。

「あ……ああ……っ」

「はあっ……名前を聞いているんだっ。さあ、答えて」

ぐちゆりと引き抜く水音と、ばんっと肌を打ちつける音が交互に聞こえる。そのたびに、腰の中心がどんどん痺れていく。

「あっ……あんっ！ な、名前は、アリシア……っ、アリシア・バートリッジ……っ」  
 「バートリッジ子爵の娘か」

「ち……ちがつ！ ああっ！」

次第に思考が鈍くなり、快楽に溺れていく。教えきれないほど体を貫かれて、お腹の奥深くまでぐちゅぐちゅに掻きまぜられる。

彼は私の胸を両手で掴むと、激しく揉みしだきはじめた。そして舌で胸の蕾を舐り、強く吸いついてくる。

「あ……あっ！」

一方的に与えられる快感に抗えない。歯を食いしばってもこらえきれず、唇の端から悦楽の音が漏れ出してしまふ。

「ふっ……ん……んああっ！」

「私にここまでさせておいて、覚悟はできているんだろうね！ 君の中にはもう、私の子種が注がれているんだぞ！」

「やあ……っ！ だ、だめです……！ 早く……抜いてください……！」

涙声で懇願しても、彼はやめようとしなない。

「仕方がないだろう！ 君が私を煽るから悪いんだ！ どうしてそんなに誘うような目

で私を見る!？」

「誘ってなど……あっ！ やだあっ……！ やあっ！」

最奥を穿たれ、雷に打たれたような快感が全身を突き抜ける。頭が真っ白になって、目の前がチカチカした。

「ああああ……っ!!」

今までにないほど大きな嬌声を上げ、ぐったりと脱力した。しかし全身にざわざわした感覚が残っている。

彼は荒い息を何度も繰り返して、節くれだった指で私の頬を優しく撫でた。けれど表情は冷たく、責めるような目で私を見る。

「イットみたいだね。君の中はこんなに濡れそぼっているのに、誘っていないだなんてよく言えたものだ。ほら……また私のものを締めつけている」

「だって勝手に体が……ああっ！ 動かないでください！ もう……許して……」

「私は達していない。まだ……駄目だ」

そう言うと、彼は私の両膝を抱えこんで、再び腰を動かしはじめた。

その容赦のない動きに、私の体は激しい快感に襲われる。

「あっ……だめ……！ 抜いてください……ああっ！ 子どもができたら……！ ん

んっ！」

「はあっ……もうやめられるはずがないじゃないか……っ！ ……くうっ！」

彼は荒い息を吐き、何度も繰り返し腰を打ちつけてきた。

最奥を突かれて、次第に意識が朦朧としてくる。

やがて中に熱いものを注がれた瞬間、ほんやりとした視界にふと大きな窓が映った。カーテン越したが、朝日が昇っているのがわかる。

朝が来てしまう——そう思ったのを最後に、私は意識を手放した。

——目を開けると、そこはまだ見知らぬ部屋のベッドの上だった。

カーテンは閉められたままだが室内は明るく、すっかり日が昇ったのだとわかる。

私は全身のだるさを感じながら、何気なく寝返りを打つ。

するとベッド脇の椅子に、スーツを着た男性が座っていた。彼は腕を組んでこちらを見ている。

その明るい青色の瞳を見て、すぐに先ほどの男性だと気づく。垂れ目がちだが、視線は強く迫力がある。髪は整髪料で整え、上品に仕立てられた紺色のスーツでピシッと決まっていた。

その冷たい表情からは、感情を読み取ることができない。

私はベッドに寝たままの状態で、咄嗟に顔を背けて身をこわばらせた。その途端思い出したかのように、下腹部がじんじんと痛みだす。

「大丈夫か……？ アリシア」

私の体を気遣う言葉だが、声は冷たい。

返す言葉が見つからず黙っていると、彼は大きなため息をついた。

「はあ。パートルリッジ子爵の娘じゃないと言っていたな。では、一体君は何者なのだ？」

「わ……私はアリシア・パートルリッジと言いました、パートルリッジ子爵の姪です。昨夜は、熱を出した従姉の代わりに、夜会に連れてきてもらいました」

絞り出した声は掠れていた。きつと、彼に激しく抱かれたせいだろう。

体も痛くて、まともに動けそうになかった。

「そうか……」

「あの……昨夜は酒に酔ってしまったようで、何も覚えておらず本当に申し訳ありません。ただ、お互いにとつて望まない状況になっているのは理解しています。ですから、その……昨夜のことは、なかったことにしませんか？ ここはメイスフィールド公爵様のお屋敷ですよ。夜会の最中に、ここで一夜を共にしたことが知れたら、よくない噂

が流れてしまうかもしれません。メイスフィールド家の方に見つかる前にお屋敷を出ないと、大変なことになります。ですから私はすぐに……」

ここを出ます、と言おうとしたが、私は言葉を続けられなかった。彼が憤った表情を浮かべ、鋭く睨んできたからだ。

「望まない状況……ね。ところで、どうして君はそんなに困った顔をしているのだ？」  
「あ……あの、早くこのお屋敷を出ないといけないのに、体が痛くて歩けそうにないんです。どうしたらいいのでしょうか……」

じわりと涙がこみ上げてくる。

男性はひどく怒っているようだし、私を連れて屋敷を抜け出してくれるとは到底思えない。このまま放置される可能性すらある。

「……心配するな、屋敷を出る必要はない」

彼は組んだ腕をほどいて顔を背けると、私のほうに手を伸ばした。こちらを見ようともしないのに、泣くと言わんばかりに頬を指で撫でる。

「え……？　どういう意味ですか？　こんなことが周囲に知られたら、メイスフィールド公爵様はともにお怒りになると思うのですが」

「だから心配ないと言っている。すでにメイスフィールド公爵は怒っているが、君が屋

敷を出る必要はない」

私はキョトンとして、彼をまじまじと見る。

すると彼はようやくこちらに顔を向け、呆れたようにつぶやいた。

「私がこの屋敷の当主、メイスフィールド公爵だ。この客室には、私が指示しない限り誰も来ない」

「え……？　公爵……様？」

あまりのことに言葉を失う。同時に、涙も止まった。

「……次の月のモノは、いつくるんだ？」

彼——メイスフィールド公爵はそう言って、深いため息をつく。

私はひとまず姿勢を正そうと上半身を起こす。

その時、自分が仕立てのいいシャツを着せられていることに気がついた。体も拭いてもらったようで、肌がさっぱりしている。

誰かが体を綺麗にしてくれたのだと思うと、恥ずかしくて仕方がない。きつと、侍女がやってくれたのだろう。氷のような冷たい目で私を見ている公爵が、そんなことをするはずがない。

もう一度公爵の顔をよく見ると、ベッドの中で見た彼とは違っていた。今朝ベッドに

いた時の彼は、もう少し感情をあらわにしていたように思う。

だが目の前の彼は無表情で、威圧的だった。

そんなことを気にしていると、返事が遅れてしまった。

公爵は苛立ったように声を荒らげる。

「だから、次の月のモノはいつくるのだと聞いている！」

再び問い質されるが、その意図がわからない。私は戸惑って首を傾げた。

「あ……あの、どうしてそのようなことをお知りになりたいのですか……？」

「君は私の子を妊娠している可能性がある。君は昨夜が初めてだったのだろうか？」

公爵の言葉に、顔がかあつと熱くなる。確かに私は昨夜まで、男性経験がなかった。

それはわかりきったことだからか、彼は返事を待たずに話を続ける。

「月のモノがきて、君が妊娠していないと確信できるまでは、この屋敷で過ごしてもら

う。これは決定事項だ」

「そ……そんなっ！」

私の月のモノは終わったばかりだ。次の月のモノがくるまで——最低でも三週間はこの屋敷に滞在するということになる。そんなことはとても受け入れられない。

私はシーツを握りしめて、ぐっと身を乗り出した。

「そ、そ、それは無理です！ 私には仕事がありますし、それに未婚の身で男性の屋敷に滞在するだなんて、非常識なことではできません！」

動揺する私を見ても、公爵は顔色一つ変えずに淡々と語る。

「……君は、結婚相手ではない男性の子種を、その体に受け入れたのだ。それ以上に非常識なことはないだろう。とにかく、君が私の子どもを宿してはいけないことが明確になるまでは、私のそばにいてもらう。そうでないと君は、他の男性の子を産んでメイスフィールド家の跡取りだと偽り、ここに押しかけてくる可能性があるからな」

「子種を受け入れたと言われましても、あれは——」

大きな声で反論しようとしたが、お腹に力が入った時に温かい液体がドクリと出てきて、股の間を濡らした。それが公爵が放ったものだと思いつき、頬を熱くして下腹部に手を当てる。

「とにかくアリシア。私の子を妊娠した可能性がある限り、君を解放することは絶対にない。メイスフィールド公爵家は、王家の流れを汲む由緒ある家系だ。私自身も王位継承権を持ち、順位は五位になっている。もうこれは私たちだけの問題ではない」

王位継承権という言葉聞いて、私はびくりと体をこわばらせる。

今さらながら、メイスフィールド公爵家の家格の高さを思い知った。今は鈍痛を感じ



るだけのこのお腹の中に、もしかしたら王位継承権を持つ子がいるのかもしれないのだ。事の大きさを実感し、気を引き締める。

「わかりました。記憶がないとはいえ、私にも責任があるのでしよう。公爵様のおっしゃる通り、次の月のモノがくるまで公爵家に滞在させていただきます。でも妊娠してないことがわかれば、家に帰していただけますよね」

そう尋ねたら、公爵はなぜか目を逸らした。

何か怒らせるようなことでも言ったのだらうかと心配になる。けれど公爵は無表情のまま低い声で答えた。

「……もちろんだ。しかし、もし妊娠していれば、たとえ本意でも君と結婚する。公爵の妻としてはいささか身分が低いが、子爵家の血が流れているのだからそこは目をつぶろう。今日は一日この部屋で休みなさい。食事はあとで届けさせる。明日は出かけるから、そのつもりでいるように。ドレスはこちらで用意しておく」

「出かけるって、どこにですか?」

その言葉に、公爵は私をまた睨みつけると、淡々と語った。

「パトリッジ子爵家と君のご両親のところだ。ひとまず連絡はしておくが、きちんと説明しておかないと困るだろう。それに君にはこの屋敷に一ヶ月の間、滞在してもら

うのだからね。子どもができていなかった場合も、相応の慰謝料は払う」

公爵の言葉を聞き、全身が冷たくなるのを感じた。

「ま、まさか今おっしゃったことをそのまま両親に話すつもりですか!? それはやめてください。そんなことを突然聞かされたら、両親がショックで倒れてしまいます。もし私が妊娠していたら、その時は私から両親に話をします。ですから妊娠が確定するまでは、私たちの間にあったことは内密にしていただけではないでしょうか。それに、私は慰謝料なんていりません!」

私が慌てて言うと、公爵は眉根を寄せた。眉間に二本のしわが深く刻みこまれる。

「アリシア……もしかして君には婚約者がいるのか? だからご両親に、私とこのことを知られたくないんだろう?」

「そ、そんな相手はいません。ですが、自分たちの娘が公爵様と一夜を共にして、子を宿している可能性があるなんて、ショックが大きすぎるでしょう? それに、一夜の過ちを両親に知られるのは……」

「過ち……」

私が言葉を濁すと、公爵はほんやりと言葉を繰り返してから、こちらに背を向けた。

「ならば君は、私の仕事の手伝いをするという名目で、この屋敷で暮らせばいい。パー

トリッジ子爵家と君の両親に、その旨の手紙を出しておこう。君の勤め先は——王立図書館だと言っていたな。そこにも、私が連絡しておく」

感情のない低い声が耳に響く。

私は昨夜、仕事のことを公爵に話していたようだ。

彼は私のことをどこまで知っているのだろうか。少し不安になる。

（もうお酒は二度と飲まないわ……。まさか、こんなに大変なことになるだなんて、思っでもみなかった）

もしも妊娠していたら、公爵は私と結婚すると言った。しかしそれは、愛のない結婚。彼は私のことを好きではないどころか、憎く思っでもおかしくない。

（気持ちの通じ合っていない相手——しかもこんなに冷たい人との結婚生活なんて、生き地獄と同じだわ……。！ もし彼の子を宿していたとして、私はその子を愛し、育ていける……?）

不安でたまらなくて、お腹に手を当てた。

私は、メイスフィールド公爵について知っていることを、必死で思い出す。

十五歳の時に両親を事故で亡くし、公爵位を継いだこと。

現在は領地を管理すると共に、汚職や犯罪を監視する組織をまとめていること。

彼の代から始めた貿易業でも莫大な利益を得ていて、その財産は王国でも一、二を争うほどだという噂があること。

常に冷静沈着で、どんな無慈悲な決定でも顔色一つ変えずに下すこと。

その様子を揶揄して、『冷血公爵』とも呼ばれていること。

——これらが、私の知るメイスフィールド公爵についてのすべてだ。

そして今こうして話しているだけでも、彼が『冷血公爵』と呼ばれていることに納得できる。

不安は膨れ上がるけれど、かといって彼の提案を断ることもできない。

こうして、表向きは公爵の仕事を手伝うということで、名門メイスフィールド公爵家に滞在すると決まったのだった。

## 2 公爵家での生活

私はサイラス・ド・メイスフィールド。

公爵家の跡取りとして生まれた私は、立場にふさわしい人間となるための教育を施されてきた。どんな時でも冷静に物事を判断して決定する。感情に揺るがされることのないよう、自らを律してきたのだ。

感情をあまり表にも出さないようにしていたが、それが顕著になったのは、十五歳のころ——両親が事故で他界し、私が爵位を継いでからである。

感情に蓋をして職務に徹しなければ、メイスフィールド家の莫大な財産と領地を管理することは不可能だったのだ。

そうしているうちに、どうやって感情を表せばいいのかわからなくなってしまう。

次第に人から恐れられるようになり、気がつくとも世間では『冷血公爵』と呼ばれていた。それでも二十代のころは近づいてくる女性もいたが、会話が続き、深い仲にはなれない。このまま伴侶を得ずに、人生を終えるのだと思っていた。

そんな私のもとに、昨夜、天使が舞い降りた。彼女——アリシアは天が私に与えた一筋の光だ。

夜会で出会ったアリシアは、不思議な女性だった。

『冷血公爵』と呼ばれ恐れられている私に、物怖じせずに近づいてきた。それどころか、まるで昔から知り合っていたかのように自然と隣に座り、私を受け入れてくれたのだ。

私はあつという間に彼女に心を奪われ、昂る感情のままに抱いてしまった。アリシアは酒に酔っていたし、名前すら聞いていなかったが、彼女は言ったのだ——私と抱き合っ

て『幸せだ』と。

その時、彼女が何者であろうと絶対に結婚しようとは心に誓った。夜が明けて目を覚ました彼女も、最高に可愛かった。愛おしくてたまらず、もう一度抱いてしまったのだが——

夢心地のまま彼女の体を堪能している途中、様子がおかしいことに気がついた。

なんと、アリシアは昨夜のことを覚えていないらしい！

私とのことを間違いだと言われ、かつてないほど絶望する。

しかし、すぐに気持ちを落ち着かせ、考えを巡らせた。

(そうだ。彼女が私の子を宿せば、結婚する口実になる。やっと出会えた唯一無二の女

性を、失いたくない！)

そう考えた私は、彼女の中に思いきり子種を注いだ。

そして、それを理由に、アリシアをしばらくこの屋敷に滞在させることに成功した。かなり強引ではあるが、彼女を失わないためには、これが最善の策だったのだ。

(どうかアリシアが私の子を身籠っていますように――)

私はそう何度も神に祈るのだった。



一夜の過ちをおかした私は体中が痛くて、昨日は丸一日ベッドの中で過ごすことを余儀なくされた。

メイスフィールド公爵も一日中、私と同じ部屋で過ごした。食事や仕事はもちろん、夜も簡易ベッドを持ってこさせ、隣で眠る始末だ。

きつと私がこの屋敷から抜け出さないよう、見張っているのだろう。半ば呆れながら、私はベッドの中で目を閉じた。一日にたくさんのが起こりすぎたので、疲れもあつてか、すぐに意識を沈ませた。

そして今朝、目が覚めると一番に目に飛びこんできたのは、隣のベッドで眠る公爵の姿。私は声を上げそうになるほど驚いたが、すぐに状況を思い出し、彼を起こさぬようそつとベッドから下りた。ゆっくり休んだからか、体の痛みは引いている。

ひとまず体の調子を見ようと部屋の中を歩いてみた。  
(だいぶよくなったかしら)

体のあちこちを動かしていると、公爵が突然ガバツと起き上がった。彼はきよるきよると部屋を見回し、私に気がついて大きな声を上げる。

「ベッドにいないと思ったら、そんなところにいたのか！ もう体は大丈夫なのか？ どこが変わったところは？」

「お、おはようございます、公爵様。おかげさまで、すっかり元気になりました」  
公爵が、ほっと息を吐く。

(……あら?)

なぜだか彼が、心から安心したように見えた。

「アリシア、もう歩けるようになったんだな」

「……はい、公爵様」

そう答えながら、ぼんやりと考える。

（もしかして彼は、私が心配で一日中そばにいてくれたのかしら？——でも、相手は『冷血公爵』様なのだし……ああ、責任を感じてそばに就いていた、とか？ 何にしても、私を見張るためだけじゃない……のかもかもしれないわね）

しかし彼は相変わらず無表情で、その心情を推し量ることは難しかった。

その後、侍女に手伝ってもらってドレスに着替える。公爵も着替えのため一旦自室に戻った。

そして朝食が準備された食堂へ、侍女が案内してくれる。

食堂まで行く間に、改めてメイスフィールド公爵家の屋敷を観察する。伯父に連れられて貴族の屋敷で催される夜会に何度か行ったことがあるが、そのどれと比べても別格だった。

王都に広大な敷地を有しているだけでなく、内装や調度品がとてつもなく豪華で高級なものばかりなのだ。その上、歴史的価値のある芸術品が、屋敷のいたるところに飾つてある。総額でいくらになるのか、私には想像もつかない。

だが残念なことに、それらはただ置かれているだけ。その美しさや素晴らしさを理解した上で飾られているようには見えなかった。

そして屋敷内を歩いているうちに、公爵の几帳面な性格を理解した。

暗いモスグリーンのカーテンは、ひだがキツチリと綺麗に整えられている。単調に飾られた装飾品や、等間隔に並ぶ絵画。絨毯や壁紙は無難な——というより地味な色で統一されていた。

しかし、とにかく華やかさがない。夜会の会場となった大広間はそこそこ華やかだったが、それ以外の場所に関しては装飾品がもったいなく思えるほどだった。

これほど大きな屋敷が、無機質な印象だなんて味気ない。

無駄を省くようにと徹底されているのか、使用人は会話を交わすことなく無表情で仕事をしている。私を見ても誰も驚かないばかりか、静かに頭を下げるのみだ。

伯父のパートリッジ子爵の屋敷では、使用人とも和気あいあいと話をするのが普通だったのだ、その違いに驚く。

戸惑いながらも、案内の侍女に公爵について聞いてみた。彼のがわからなすぎるので、情報収集を試みたのだ。けれど、返事はほとんど「お答えできかねます」だった。わかったのは、この広大な屋敷で暮らすのは公爵と弟のダレン様の二人だということと、彼らの年齢だけ。公爵は三十四歳、ダレン様は二十五歳であるらしい。

あまり収穫が得られないので話題を変え、屋敷について尋ねる。

すると公爵家には、貴族の間では有名な書庫があり、歴代公爵が集めた貴重な書物が保管されていることがわかった。

（貴重な書物ですって！是非読んでみたいわ！）

そんなことを考え、胸を躍らせているうちに食堂に到着する。

大きな長テーブルに、公爵が着席していた。

テーブルには真っ白なテーブルクロスがかけられ、たくさん料理が所狭しと並べられている。

給仕する侍女とは別に五名の侍女が部屋の隅に並び、公爵の後ろには執事が控えている。私はそそくさと公爵の向かいの席に座る。

食堂にはたくさんの人がいるのに、みんな無表情で冷やかな空気だ。さっきまでの興奮が、一気に冷めていく。

すると執事から順に、使用人たちが私に挨拶をしてくれた。私は一人ひとりに会釈を返す。

そうして全員が挨拶を終えたところで、公爵は無言で食事を始めた。

私もナイフとフォークを持ってはみたものの、手が震えてしまう。公爵がなぜか私を睨みつけているからだ。

居心地が悪くて、私はうつむいたまま朝食を口に運んだ。

一流シェフが作ったのであるう朝食は、シンプルだがとても美味しい。気づけばどんどん食事が進んでいた。ひと息つこうと紅茶を口にすれば、口中に繊細で豊かな味が広がる。その美味しさに、自然と顔がほころんだ。

紅茶を注いでくれた侍女に思わず話しかける。

「この紅茶は春摘みのもんですね。ということは、先週あたり港に届いたものかしら。すつきりとしたフルーツのようないい香りがします。それと紅茶に入っている蜂蜜は、ラベンダーの花から採れたものね。本当に美味しいわ。ありがとう」

私の言葉を聞いて、公爵が紅茶のカップを持つ手を止めた。

「メイスフィールド公爵家は、常に一流のものを取り揃えている。美味であるのは当然のこと。それ以上でもそれ以下でもなく、礼を言うほどのものではない」

公爵の発言に、私は少しムツとする。

「確かに、一流のものを選ばれているようですね。でも、この春摘みの紅茶をこれほど美味しく淹れるのも、紅茶に合う蜂蜜を選ぶのも、簡単なことではありません。淹れてくださった方のお気遣いと努力があつてのこと。それに対して、感謝を申し上げたのです」

言いたいことをひと息で言い切ると、胸がすつとした。けれど公爵は感情のうかがえ

ない目で私を見るだけだ。

彼に気持ち悪わかってもらいたくて、私は言葉が続ける。

「それに……紅茶の味と香りの違いによって、季節を感じられます。私は春摘みの紅茶の香りを嗅ぐと、春だなあと思います。この紅茶を飲んだだけで春を実感して、なんだかワクワクしてくるのです」

紅茶の香りを大きく吸いこんでみせてから、公爵に微笑みかける。

すると彼は戸惑ったような表情を浮かべて、紅茶を一口飲んだ。そして無言で目を逸らす。

私の言葉に何かを感じてくれたのかしらと嬉しくなって、私はさらに続けた。

「メイスフィールド公爵家は、その年一番早い春摘みの紅茶を購入されるのですね。我が家では、もつとあとに出来る庶民向けのものを買います。この紅茶には及びませんが、春の香りがして美味しいですからね。春摘みの紅茶を買ったら、その時季に庭で採れる苺を使ったケーキを焼いて、お茶会を開きます。私の焼いたケーキは美味しいとみんな喜んでくれます」

「……苺が実をつけるころには君はここにいないかもしれない。よって私がそのケーキを食べることもない。無駄な話はやめてくれ」

公爵は目を逸らしたまま、冷たく言い放った。

彼がなぜ突然そんなことを言い出したのかわからず、私はきよんとしてしまふ。彼にケーキを作ると話したわけではないのに、どうして彼は自分が食べるつもりでいるのだろう。

それに、私の話はただの雑談で、コミュニケーションを取るためのものだ。利益がある話ではないけれど、だからといってコミュニケーションを断っていたら人間関係が築けない。彼の思考回路が理解できなかった。

私との会話を嫌がるのは、きっと彼にとつて私が邪魔な存在だからなのだろう。

彼は、私が妊娠してはいけない——早く去ればいと望んでいるに違いない。

（私のことなんか知りたくもないのだわ。妊娠していたら、こんな冷たい男性と一生を共に過ごすことになるなんて、絶対に嫌よ……）

そう考えると、胸の奥がチクリと痛むのだった。

朝食のあと、公爵は仕事場である執務室に行くというので、私は「それでは」と礼をして、与えられた部屋に向かって歩き出した。

すると、突然公爵が腕を掴んでくる。私が驚いて顔を上げると、彼は無表情で淡々と

告げた。

「待て、アリシアは私と一緒だ。そう言ったはずだぞ。私のそばにいてもらうと」  
 「そばにと言われなくても……公爵様はお仕事をされるのでしょう？ 私は公爵様のお仕事を手伝うことはできませんし、そばにいても邪魔になってしまいます」

「心配するな、君にはなんの期待もしていない。ただ私の隣で座っていればいいんだ」  
 そう命じられて、私はがっくりと肩を落とした。せっかく公爵家に滞在するのだから、書庫にあるという珍しい本を読み漁ろうと思っていたのに。私の小さな野望が、見事に崩れ去った。

公爵に腕を掴まれ、彼の執務室に引きずられるようにして連れていかれる。

キッチリと整理整頓された室内には、大きな机といくつかの棚がある。棚には紐で綴じられた書類が綺麗に並んでいた。

感心している私に、公爵が身振りで机の脇にある椅子を示す。ここに座れということらしい。

私は小さいけれど背もたれのある椅子にしぶ腰かけた。

すると、公爵は上着を脱いで私のお腹にかける。

公爵の思わぬ優しい行動に、私は戸惑う。

「あ、あの……これは……」

「体をしつかりと温めておきなさい。君はどうでもいいが、私の子が風邪を引いてしまいかもしれない」

（え……？ 公爵様は私が妊娠していないことを願っていると思っただけ……

そうではないの？ もしかして、妊娠していてほしいのかしら？）

そんな疑問が頭をよぎる。

万が一妊娠していたとしても、まだ胎児の体もできていないころだし、そもそも胎児が風邪を引くわけがない。

いい大人である公爵が、そのことを知らないはずもないだろう。

公爵の考えていることが、まったくわからない。

私は公爵に嫌われていると思っただけだ。彼の表情は乏しく、感情が読み取りにくい上に、言葉も簡潔すぎるからだ。

でも冷たくされていると思っただけなのは、私の誤解だったのだろうか？ そういえば、今朝も彼は冷たいだけの人ではないのではと感じた気がする。

しばらく考えを巡らせていたが、まだ出会ったばかりの公爵の真意など、私にわかるはずがない。私はすぐに考えるのをやめ、椅子に体を預けた。



公爵はすでに仕事を始めているようで、羽根ペンで何かを書いては紙をめくっている。壁には大きな窓がいくつか並んでいて、公爵家の広い庭園が一望できた。庭園の向こうに教会と、その奥に王城の塔が見える。

窓越しに庭園を眺めていると、ふと自分の仕事のことが気になった。

公爵は職場にも話を通してけると言っていた。でも私が休んで、職場は大丈夫だろうか。

というのも、上司である司書のデイラン様は、本の知識がまったくと言っていいほどなく、あまり仕事ができないのだ。きつと、てんでこ舞いになっているに違いない。

（申し訳ないけれど、私にはどうしようもないわ。戻った時にたくさん働いて、挽回させてもらいましょう。ああ、仕事のことを考えていたら、本を読みたくなってきたわ。でもそれを言ったら公爵様は怒るかしら）

そんなことを考えているうちに、春のぼかぼかした暖かい陽ざしの中で、まどろんでしまう。次第に瞼が重くなつて、意識が深い闇の中に沈んでいく。

「アリシアっ!!」

突然大きな声で名前を呼ばれ、私は慌てて目を開けた。すると、目の前に公爵の顔がある。

彼は私が座る椅子の前に膝をつき、私の肩を両手で掴んでいたのだ。そして感情のない目で、私を見上げている。ただその顔色は、なんとなく青白く見えた。

「あ……申し訳ありません。私、眠ってしまったようです」

「はあつ……君がまた気を失ったのかと思つた。驚かせるな。私をショック死させるつもりなのか」

公爵は私の肩を掴んだまま頭を垂れると、大きなため息をついた。彼の手が、ほんの少し震えているような気がする。

（もしかして、私を心配してくれたのかしら？ まさか私のために、公爵様ともあろう方が、床に膝をつくだなんて……）

驚きながらも、とりあえず謝る。

「申し訳ありません。何もやることがないので、つい……。あの、書庫があると耳にしたのですが、本をお借りして、ここで読んでもよろしいでしょうか？ このままだと、また眠ってしまいそうですから」

公爵は手を離して立ち上がると、冷たい目を向けてきた。

「ああ、そのほうがいいだろう。こんなことが続くと、私の仕事の邪魔になる。非常に迷惑だ。だが屋敷を出てはいけない。書庫で本を選んだらすぐに戻ってくるんだ、いい

ね。書庫の場所は、侍女たちに聞くように。ああそれと、もし他の男に会っても私にしまいたいに誘惑してはいけない」

——心配してくれたのかもしれないと思ったのは、私の勘違いだったようだ。仕事を邪魔された不快感と、嫌味をぶつけられてしまった。

それはさておき、公爵の許可が出たので、私は意気揚々と執務室を出る。すると廊下に侍女が控えていたので、書庫の場所を聞いてそこに向かった。

すれ違う使用人たちと挨拶を交わしながら歩いていると、渡り廊下で庭師長の男性と出会う。素敵な庭園について感想を伝えると彼は喜んで、花の世話についての相談にも乗ってくれた。

彼と別れて少し歩いたところで、書庫に到着する。扉を開けると、中にはお宝がびっしりと並んでいた。

思わず感嘆の声が出る。

「ああ……素敵！ こんな古い本まであるなんて！」

書庫には、古い書物の独特な匂いが立ちこめていた。本棚が四方の壁全体にあり、部屋の中央にもいくつも並んでいる。どれも隙間がないほど書物が詰まっっていて、王立図書館では閲覧不可能な本まである。

どの本から読もうかと悩んでいると、突然背後から声をかけられた。

「兄さんから聞いたよ。あんた、兄さんと一夜を共にしたんだってね？ 兄さんは俺に気を遣ってはつきり言わなかったけど、あんたが襲ったことはわかってるからな」

振り向けば、公爵によく似た青年が書庫の扉に寄りかかるようにして立っていた。今の言葉やその外見から考えて、彼が公爵の弟のダレン様なのだろう。

彼は公爵と同じ、金色がかかった茶色の髪に、青い瞳をしている。そして少し長めの前髪を流していた。

私はドレスの裾を持ち上げ、頭を下げる。この国では、身分の低い者が身分の高い者より先に名乗ったり、挨拶の言葉を口にしたりすることは無礼とされているのだ。

私が黙って待っていると、ダレン様は苛立ったように声を荒らげた。

「返事もできないのか、無礼な女だな。あんたが兄さんを襲ったんだろ!？」

彼こそ名乗りもしないうちに突っかかってくるなんて、貴族としての礼儀がなくなっている。

そう思ったがなんとか呑みこみ、代わりに彼の言葉の意味を聞き返した。

「あの……襲ったというのはどういう意味でしょうか？」

「兄さんは、どんなに誘われても女性の色香に惑うことはない。そんな兄さんが一夜を